

笑顔礼讃西東

狩支部 桐の花句会様(東京都文京区) 2~3

やまびこ俳句会様(群馬県高崎市) 3~4

栗山ほなみ様(千葉県山武郡) 5

投稿作品 6~10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(冬におすすめ!あたたまる食べもの) 11~12

二ユースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 吉田緑様 14

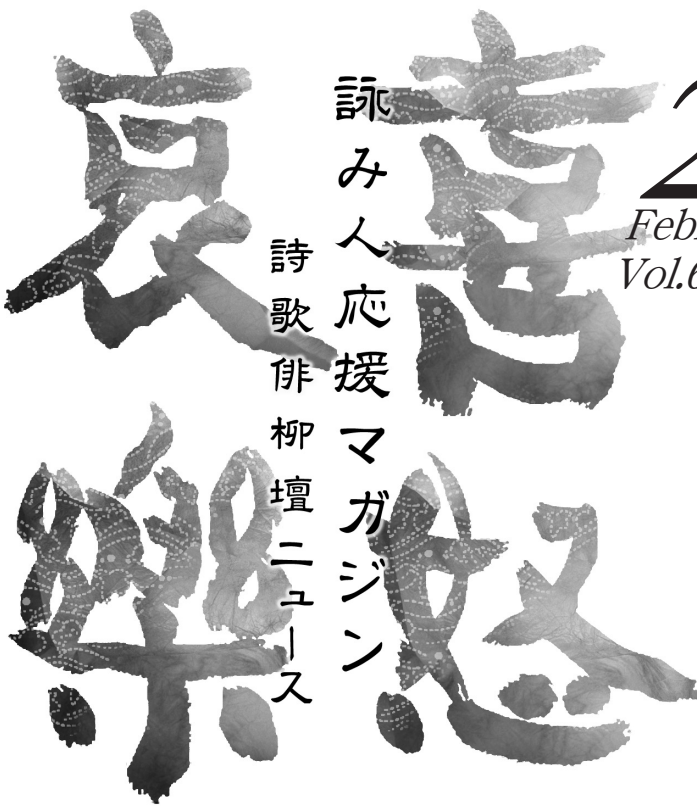
新潟ぶらり/早朝の福島潟/朱鷺メッセ 15

詠み人の「リレーエッセイ」 歌人 佐藤弓生様 16

2 February Vol.60

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇二ユース



温古知新⑭

「源氏物語」5

玉鬘と急接近した源氏。その後、二人は……。

八月のある日、激しい台風が都を襲いました。六条院の庭の草花も倒れ、そこへ訪れた夕霧は偶然紫の上の姿を垣間見、その美貌に衝撃を受けます。その後も、紫の上の艶姿は夕霧の脳裏から離れません。台風が去った翌日、源氏は夕霧を連れて、女君たちの見舞いに回りました。玉鬘の元を訪れた時、こつそりと覗き見た夕霧は玉鬘の美しさに見とれると共に、親子とは思えない振舞いを見せる源氏に驚き不審に思います。

十二月、冷泉帝の大原野への行幸が行われ、玉鬘も見物に参加。玉鬘は冷泉帝の端麗さに心惹かれました。また、源氏は玉鬘に尚侍としての出仕を勧めます。源氏は玉鬘の装着(女子の成人を示すもの)として行われた通過儀礼)を急ぐかわら、実父・内大臣に腰結いの役を頼みますが、玉鬘が実の娘とは知らない内大臣は母大宮の病を口実に遠慮。源氏は自ら大宮の見舞いに参上し、大宮と内大臣に玉鬘の素性を明かします。内大臣も今度は喜んで腰結いを引き受け、ようやく親子は対面を果たしました。

その後、大宮が亡くなり、尚侍に任命された玉鬘は孫として喪に服しながら、出仕を思い悩みます。喪が明けて、玉鬘の出仕が十月に決定。求婚者たちからは諦めきれない文が届き、とりわけ髭黒や螢兵部卿宮は熱心でした。玉鬘は其中で、螢兵部卿宮だけに返事を送ります。

尚侍として出仕を控えていた玉鬘でしたが、その直前、髭黒が女房の手引きで強引に契りを交わし

てしまいます。髭黒はその後玉鬘を迎えるために邸の改築に取り掛かりますが、その様子に、今はすっかり見捨てられた北の方は絶望、娘(真木柱)とともに実家に戻りました。明けて新年、玉鬘は男子を出産、髭黒の正室として家庭に落ち着きます。

また、東宮の元服に合わせ、源氏は明石姫君の装着の支度を急いでいました。雨の少し降った二月十日、螢兵部卿宮を迎えて薫物合わせの判者をさせます。その夜、管弦が催され、弁少将が「梅枝」を歌いました。翌日、明石姫君の装着が盛大に行われます。

一方、内大臣は、夕霧と雲居雁の恋を無理矢理裂いてから数年、二人の恋愛は世に知られていないし、自分が折れるべきだと考えるようになっていました。四月、自邸で藤の花の宴を開くという内大臣の口上を持った息子の柏木が、夕霧を迎えにやってきました。そして、内大臣は、藤の花の宴で雲居雁と夕霧の結婚を認めました。その一方で、源氏の娘明石姫君の宮中入りが決まります。その際、入れ違いになった二人の母、紫上と明石君が初めて対面。互いに認め合った二人はこれまでのわだかまりも氷解し、心を通わせるのでした。

秋になり、四十の賀を控えて源氏は准太上天皇の待遇を受け、内大臣は太政大臣に昇任。十一月、紅葉の六条院へ冷泉帝と朱雀院が揃って行幸、華やかな宴が催されました。こうして、源氏は栄華の絶頂を迎えたのです。

玉鬘との仲を髭黒に裂かれてしまった源氏。しかし、そうした中で、栄華の絶頂を迎えた今回は、二十八帖「野分」から三十三帖「藤裏葉」までをご紹介しました。ここで、「源氏物語」の第一部は終了となりますが、第二部、絶頂を迎えた源氏、取り巻く人々は……?

(古川久美子)

狩支部 桐の花句会

指導 藤井罔彦様

(東京都・文京区千駄木1-9-1
連絡先 津端さしを様)

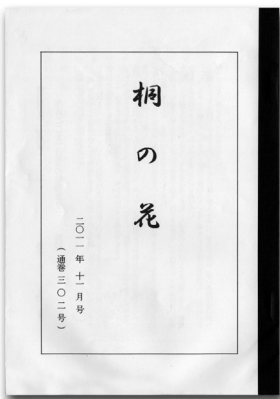


俳人協会現会長の鷹羽狩行氏が主宰をつとめる「狩」。その支部で藤井罔彦様が指導にあたられている「桐の花俳句会」にお邪魔してきました。藤井さんは、国の制度に基づくものとしては日本で最初に設立され、毎年30倍以上の倍率があるという筑波大学附属小学校で35年にわたり国語の先生としてご活躍。本日は、どんな句会が展開されるのでしょうか。

まずは藤井様よりご挨拶。その後、すでに清記された雑詠95句より5句選および1句を特選として、兼題「枯野」38句より2句を選句します。そして、各人が特選として選んだ作品の感想を述べていきます。

以下、句会の一部をご紹介します。

煮凝りを猫と分ちて留守居かな
意見／猫を飼っていないのでうらやましくて。それも、分けあっているなんて



▲会員の津端様の手による句会報

素敵な情景。
藤井／猫と二人で留守番をしているその様子がわかる。作者の心情がはつきり出ているいい句。

這ひ上がる嬰まつしぐら千布団

意見／元気があってユニークな句。陽のにおいと赤ちゃんの声、ほこりが舞いあがっているところを想像して、こんなこともあったなと。

藤井／「這ひ上がる」も「まつしぐら」も強い言い方で、表現にだぶりがあつていのような状態の布団に這ひ上がっているのか、よくわからない。

ポストまで指先の冷え冬銀河

意見／「ポストまで」に実感があり、「冬銀河」の響きと夢があるところにひかれた／いい言葉を使っているが季重なり。ポストまで行ったこと、指先が冷えたこと、冬銀河と三段切れでつながらない。

藤井／「まで」で切れるからまずい。冬銀河はいいから、言葉を取り換えて「指先の冷ゆる投函冬銀河」では。



▲さすがは元先生！
的確な指導の藤井罔彦様

枯菊や強かな反りくくりけり
意見／したたかな反りをくくっている

姿が目には浮かびおもしろい／菊を作ったことのない人の句では？ 枯菊は咲く前からロープを張つてくくらないと倒れちゃう／一つの句のなかに「や」「けり」が入っているの？／「や」は「の」でいいと思う。

藤井／残菊だとくるるでいい。実際に何を把握して何を詠みたかったのか、類想感もない方がいいし、まだまだ推敲する余地のある句だ。

霜踏みて歩幅短くなるを知る

意見／霜は規則的ではなく、まだら。もう少少で次の場所へ足が届くはずだったのに届かず、歳とったんだなと／「なるを知る」の「知る」が好きじゃない。

藤井／霜道を歩いたのか、霜柱を踏んだのか、どこで霜を踏んだのかわからなければ歩幅は出てこない。「踏み」という動詞を使わないで「霜の道」とし、「知る」は「短くなりし歩幅かな」でいい。的確に捉えられているかいないか、そこを何度も推敲することが大切。

手袋を脱ぎ乗り出し来手話婦人

意見／最初、夫人は手袋をしていたが、自分の番になって脱ぎ乗り出したというところがおもしろい／私がやりやすい、と名乗り出る感じ。

藤井／これは深い意味があり「手袋を脱いで」は西洋だと果し合ひ。どちらが先に引き金を引くか、それを手話の人に持ってきた。表現を開始するときの緊張感、真剣に相手に伝えようという空気がわかる。ただ、佳作としたのは、場面の捉え方が少し曖昧だから。



勢ひを自慢の売り子大根の葉

意見／形としてはスッキリしないが、かえってそれがおもしろい／売り子は大根の葉を自慢しているが、作者は自慢している売り子の勢ひにむしろひかれてい／言っていることはわかるが、順に読んでいくと素直に採れなかった。

藤井／「勢ひ」がわからない。的確な言葉がほしい。何を自慢しているのか、新鮮さを自慢しているならもう少し言い方がある。

寄鍋や人を笑はす人の居て

意見／今日の雑詠句の中で一番12月らしい句。「寄せ鍋」と「人を笑はす人の居て」に俳諧味があつていい／和やかなその席の様子が見えてくる、素直で気持ちのいい句。

藤井／おもしろいところはあるが「人を笑はす人」はしつこい。例えば「寄せ鍋や笑はし上手な人のゐて」など。材料がいいから言葉と表現の選択をしつかりと。

笑顔礼讃西東



▲「継続は力なり」と改めて感じる桐の花句会の皆さま

言はずともよきこと言ひて湯ざめせり
意見／湯冷めの後悔が言外によく出て
いる／いったい何を言ったんだろう、と
いう思わせぶりの面白さをいただいた
／この人はしつこいね、だから湯冷め
しちゃう(笑)／一読して付き過ぎか
な、と。

藤井／言わなくていいことを言ったので、
いさかひになって結局湯冷めした。奥
さんにかみつかれたのか？ 齢をとると
両方ともひっかかることが多くなるか
ら、私はなるべく言わないようにして
いる(笑)。句意が非常にはっきりして
いるが、散文的なので少し俳味がある
といい。

里腹にはづめる会話冬あたたか
藤井／これはどなたも採らなかつたが、
「里腹」＝「嫁に行った娘がお里帰りし
て思う存分食べること」という意味を
まず知らないと。もともとの家族同士
話が弾んであたたかいということ。

◆兼題「枯野」 【特選】

四隅より錆びる看板大枯野
藤井／「四隅より錆びている」と見てい
るところが俳人の目。それと大枯野が
効いている。枯野と看板の情的なニュア
ンスが響きあっ
て、現代にもあ
る景で古さ感
じない。「狩」の
信条は「古典を
現代に生かし、
作品本位を貫
く」こと。



◆藤井様の句

山茶花の月に散りつぐ花ならむ
暖房や目に一閃の注射針
たちまちに枯野となりて休耕田

■メンバーの中には、指導者の20年前
の教え子のお母様もお二方いらして、
和気あいあいとした雰囲気。自分の意
見、疑問に感じたことをぼんぼんと口
に出すのは、ひとえに俳句が好きで上
達したいから。「なんとなくいい句」と
いう曖昧さは排し、どこがよくてどこ
が足りないのかを検証する。毎月の手
作りの句会報も通巻302号(25年強)
というから、その地道な鍛練のほどが
うかがわれる。「狩」のモットーの伝播
者として、一人一人の個性を引き出す
指導者として、静かな情熱を感じる藤
井様。途中奥様の介護のために退席さ
れる方もいらしたが、わずかな間でも
この会に参加したい、という魅力がわ
かるような気がした。(木戸敦子)

やまびこ俳句会 新年俳句大会

主宰 吉田未灰様
(群馬県・高崎市)

1月15日、ホテルメトロポリタン高崎
において開催された「やまびこ新年俳句
大会」にお邪魔させていただきました。
会場に入ると、金屏風や扇など新年ら
しいしつらいと、ズラリと並んだ日本の
景品の数々。さあこれから何が始まるの
か、浮き立つような雰囲気です。

志賀敏彦様の開会挨拶のあと、一
同「若者たち」の替え歌で「やまびこの
うた」を斉唱する。

「やまびこのうた」

やまびこの道は果てしなく遠い
だのになぜ歯をくいしばり
詠いつづける まことを求めて
やまびこの道は希望へとつづく
だのになぜなにを探して
詠いつづける まことを求めて



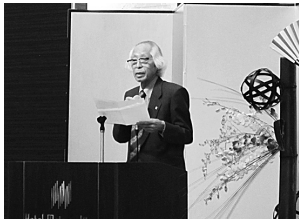
▲生涯を上州の俳壇・文芸に尽力する
吉田主宰

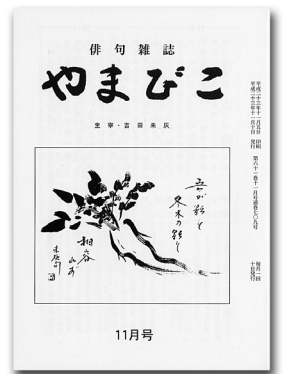
主宰の挨拶に続き、同人会長の平野
摩周子様より「気持ち弱いと弱い句
しか作れない。スポーツ選手の毎日の
練習と同じで数を作って鍛えないと上
達しない。つくづく多作、推敲の大切
さを感じる」と祝辞。続いて主宰の奥
様、笑夫人に日ごろのご苦労を称えて
花束が贈呈される。続くやまびこ賞、
新人賞各3名、奨励賞2名の表彰で
は「三者三様に個性が光って甲乙つけが
たかつた」と主宰より激励の言葉が贈
られた。受賞者の挨拶、新同人の発表
と、原田要三様の名司会で流れるよう
に会は進行する。

▶やまびこ賞の3名の方々
(左、左より2番目、右の方)



▶同人会長
平野摩周子様





▲月刊「やまびこ」2012年2月号
で712号を数える

休憩をはさんで、いよいよ新年俳句大会開始。事前に選は終わり、平野摩周子様、吉田主宰の選評がなされる。

平野摩周子選

【特選】3句

冬草や凡骨の影連れ歩く

愛

「凡骨」は聞き慣れない言葉だが、ここでは肉体だけでなく、知的能力も衰えた自分に対する謙譲語のように使われている。歩きながら、思考力の衰えたわが身を見つめ、あわれであると。そして春草でも秋草でもなく、強靱な生命力を持った「冬草」を上五に置いたことすべてが凝縮され「凡骨」を浮かびあがらせている。

着ぶくれてあらたな火種抱へ込む

彩

たくさん点が入ったが、それくらい共鳴する句。聞かなくていいことを聞いたり心配したりと、人生ままならぬもの。それでもまたやつていかななくては！と自分を励ましている。おいはれたことを詠っているわけではなく、そこがいい。

癒え兆し筆硯濡るる去年今年

好江

体調が悪いときには濡れることのない兆しとともに自分本来の精神的基盤を思い出しているような、これからの

対処の仕方を見つめ直す決意表明のよな句。

【秀逸】6句

初霜の朝征きし人帰らざる

要三

枯菊や達者もときに疎まれる

雅子

木枯や上州魂呼び覚ます

道子

妻にあらず主婦にもあらず福寿草

桂子

懇ろに妻の髪切る年用意

桑岳

老いてなほ矜持崩さず冬帽子

笑

続いて「摩周子さんの熱弁で出づらくなりしましたが(笑)」と、主宰ご登場。

吉田末灰選

【特選】3句

悴む手ぬくめて夫へ貼り薬

幸江

ご主人の看病に明け暮れている作者。優しさがあふれている。こんな奥さんのいるご主人は幸せでしょう。

言わざるは男の美学懐手

かずお

男はベラベラ喋っちゃだめ。寡黙な男のなんと男らしいこと。こういう男に私もなりたい(笑)。

妣譲りの薄き眉ひく初鏡

宏子

「薄き眉」、それが母譲りであると。そこに、母への思慕を感じる。「初鏡」というおめでたい季語が、より明るい印象を与えている。

【秀逸】5句

亡夫の座は今もそのまま置炬燵

房子

昨年ご主人を亡くされて、こちらが自分であればあちらが亡夫の席。なんことはない日常に、作者の心情がよく出ている。

足腰に加齢の軋み末枯るる

英作

「加齢の軋み」という発想が出そう

出ない。我がことを言われたようでギリとした。

針供養まだかくしゃくと糸切歯

未萌

裁縫の際、自分の糸切歯でかくしゃくと糸を切る。ズバリ端的に表現するのは俳句では難しいが、これはお見事。

炉開きの鏡にきめる帯の位置

初子

この句は素人ではできない、茶道の先生であろうと。余裕のある、日本的な雰囲気の良い句。

当てにせぬ夫が庭掃く冬日和

俊子

亭主はダメなものだが、それが時に気の利いたことをする。妻は、密かにまだ私を愛しているんだわ、と(笑)。そのユーモアがうまく出ている。

全体的に、非常に楽しく選をさせていただいた。入選作品にもいろいろ言いたいことはあるが、この辺で潔く身を引きます(笑)。



会場を移して新年会へ。主宰より「昨年は、一代で俳誌700号という稀な記録を達成したこともありチャホヤされよくなかった。何年もやっていると臺が立つ。今年からは、改めて新進気鋭の精神で進んでいきたい。そのためにも、誰もが詠えることを詠っていたのではダメ。そこを打破して、日本で自分しか作れない俳句を作り、あつと言わせてください」と開会のご挨拶。あとは、各テーブル入り乱れて飲んで歌って、最後はカラオケ大会に！宴も終え、たくさんのお土産を手に「来年も！」と思う方、「来年こそは！」と期する方、それぞれが主宰の言葉を胸に、新しい年、やまびこの道に新たな一歩を踏み出すのでした。



①皆さんいい表情です
②詠って唄って明日への活力!
③同人の矢島様(左) 志賀様(右)



■「日常些事をポエジーに、生活の中に歌声を」これこそが、終生求め続けている詩性という主宰は、苦勞人と聞く。一人上京した工場の寄宿舎で、淋しさからふと目にした新聞俳壇の一句との鮮烈な出会いから、俳句を始めたといい吉田少年は、その後、18歳で結婚、19歳で親となり、若干27歳で自誌「山彦」(現やまびこ)を発刊。90歳の現在は、現代俳句協会顧問、群馬県文化功勞者、高崎市文化賞受賞など輝かしい経歴の持ち主。この間、国鉄のお仕事と主宰誌の二足のわらじはどれほど重かったことか。一句にかける思いが違いに違いない。生ある限りこれからも「まご」を求めて詠いつづける」。(木戸敦子)

栗山ほなみ様

(千葉県・山武郡)

昨年8月に上梓した第二歌集『夢』に続き、自分史『加奈子さんの椅子』を制作していた福田加奈子様。その自分史をまとめている最中の10月9日に亡くなられ、後を引き継いで出版にごぎつけた、娘の栗山ほなみ様にお話しをお聞きしました。

■どんなお母様でしたか？

とにかく何かをしていないと気がすまないタイプ。私たち子ども(5人兄弟)を産むごとに一つずつ新しいことに挑戦していこうと思っていたようで、放送大学を卒業したり、社会福祉士の資格をとって働き始めたり、趣味も短歌にピアノにオーディオにと実に多様。始めたらずも止められないから、こちらは振り回されっぱなし。だから、私は普通に生きていければいいや、と(笑)。



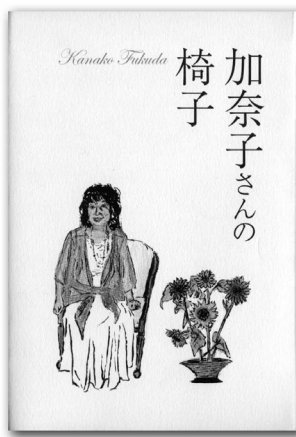
▲ネイルアートもお手の物、三人の男の子の母です。

■多方面に活動的だったのですね

いろんな形で自己表現をしたかったのですね。でも一方で、自分の心の内は絶対に言わない人だった。病気だとは言っていたが、9月の四男の結婚式の際もホスピスから式に出て、入院していたことは自分の姉妹にも言わなかった。以前から言っていた「誰も気づかないうちいつの間にか去る」という理想の最期を貫徹した。

本当に前向きで、母が60歳のとき父が亡くなった際も涙を見せたのは葬儀のときだけ。心中色々あったはずだが、疲れたとも言わずいつも元気で毎日普通に笑って生活をしていった。母の葬儀の際、兄弟みんなで棺を囲みながら、そのことが本当にありがたかったねと感謝していた。

■子どもの頃は賑やかだったでしょうね
子どもが5人もいると家はぐちゃぐちゃで友達と呼べないわ、自分の部屋はないわで恥ずかしかった。ただ、食べることに関しては「うちは貧乏だけど食事だけは豪華だね」とみんなが認めるほど。毎日7合のお米を炊き、家計はほぼエンゲル係数のみ。母はあんな年、どこまで毎日違う料理を作れる



▶表紙は「男の手によるイラスト」

かと挑戦し、2回の外食を除き364日違うメニューを作ったことを書いたエッセイ「わが家の料理は星の数」が朝日新聞に掲載されたこともあった。食事、家庭の味の大切さを教えてくれた母に感謝している。

■病気になるからには？

父が亡くなってからは、後を継いで社会福祉法人の施設長として働いていたが、仕事第一、洗刺としてまさに天職。特に病気になるからには、自分を一番必要としてくれるのはあそこ、と生きがいがあった。

抗がん剤を打ちながら頑張っていたが、5月、最後に仕事に行けなくなつた日に余命を感じたのだと思う。以来、急に痩せ体調が悪くなり、7月には自分で選んだホスピスに入り、そこでは静かに庭を見たり、あとは自分史や短歌を作ったりしていた。私に「ほら書かない」と、お尻を叩かれ「そうよね、書かないとね」と言いながら、二人で死んだ後の話をしていった。自分史の「家族へのメッセージ」のページは、母の意識がしっかりしている最後に、私が聞き書きでメモしたものだ。

■だからほなみさん宛ては短かったのですね

母もいやだろうし、自分のところはボロボロ泣いちゃうから「わかった、次いこう」と。あれは無理だった。10月8日には、目はあけていたがわかっていたかどうか、ホスピスの居間で三男の結婚式をし、その次の日に亡くなった。母は、自分のやるべきこと、信じていることをただやってきた人。仕事や趣味や、人間関係でのトラブルはあったようだが、人の悪口や愚痴は

言わず見事に中立的立場を保っていた。そのような母を誇りに思っているし、正義感ある母の姿を目標としている。

★以下、ほなみさんが17歳のときに「読売新聞」に投稿した記事より
1964年5月18日、そう、25年前、私の最愛なる父と母の結婚式でした。そして25年後のこの日、結婚記念日でございます。二人のおかげで、五人の子供は「健康」という宝物を授かり、元気に暮らしています。裕福でもないわが家が、ここまでやつてくれたのも、父と母のおかげなのです。

記念日に何かプレゼントを、といろいろ考えました。旅行、食事・etc。貧乏な高校生にとっては、無理なことばかりでした。考えた末に、最高の贈り物に気がきました。二人にとって「誇れる娘」をプレゼントいたします。産んで良かったと実感させるような「私」をプレゼントします。「誇れる」と言っても、結果についての誇りではなく、人間としてのできる限りの努力を、誇りと思えるほどしてみせたい。「努力」って、人間の最良のことだと思えます。見ていて下さいね!!

★5人兄弟の女一人。言わずとも、同性同士、どれほど娘の存在を心強く思っていたことか。お上品な出で立ちそのままに見せる繊細さと、お母様に「ほなお」と呼ばれていたというガハハと笑う豪快さは、まさにほなおの面目躍如。同じく4人兄弟の女一人の「あつお」には共感できる部分が多々あり、すぐに姉妹？兄弟？のような雰囲気。愛情深い父と、バイタリテイに溢れた加奈子さんのDNAは、確実にほなみさんの中に生き続け、プレゼント以上の輝きを放っていました。

(木戸敦子)

投稿作品

※誌面の都合上、次号より投稿作品の掲載は先着300名様までとさせていただきます。何卒ご了承ください。

川柳

- 1 めくる度躍りたくなる古日記
松田重信(埼玉県)
- 2 瓦礫処理決まらぬままに年が明け
羽田桐柳(群馬県)
- 3 誕生日お楽しみならこれからよ
岡本恵(茨城県)
- 4 回り寿司嫌われネタは目をまわし
諸橋文男(新潟県)
- 5 民の為中ノ口川国管理
大川勇(新潟県)
- 6 気にしない今日の運勢見て出掛け
石原岳(群馬県)
- 7 年金の支給を目指す税津波
佐竹章(宮城県)
- 8 バーゲンの意気込みとなるバイキング
丸山芳夫(東京都)
- 9 被災地は風も静かに吹いてくれ
大江秋月(兵庫県)
- 10 浮き雲のその後に誰も無関心
安田翔光(香川県)
- 11 戸締りを気にする程の金もなく
原田英一(千葉県)
- 12 大正の愚痴を聞いている割烹着
鈴木義雄(福島県)
- 13 あの時のあの手の温くみ忘れぬ
守屋高雄(岩手県)

- 14 消費税イギリス並みに分別を
大川聡(新潟県)
- 15 あと三年百までならと母元氣
竹村穂夫(大阪府)
- 16 戦争ダメ言いつつ軍歌懐かしむ
森本遊笑(兵庫県)
- 17 実直な課長が踊る安来節
藤沢健二(千葉県)
- 18 犬かきで言葉の海を泳ぐ喜寿
久本にい地(岡山県)
- 19 掘り返すたんすのこやしまた埋める
安部龍太(山梨県)
- 20 見て見ぬふり寒々とした風が吹く
小山恵美子(大阪府)
- 21 手のひらにひとつ幸せ転がして
高柳閑雲(愛知県)
- 22 ガンを退治し名画の謎に向かいあう
諏訪杜夫(埼玉県)
- 23 心から歌えば手足ついてくる
松田義登(福岡県)
- 24 絆の中でゆつくりと鯉呼吸
潮田春雄(千葉県)
- 25 洗脳され滝と流れて夢掴む
楠瀬美香(高知県)
- 26 かぜ引かず元気に生きること嬉し
近藤はつみ(福岡県)
- 27 リタイヤ後決定権は妻へ行き
山崎一嘉(愛媛県)
- 28 仲間割れどじょう出て来て仲直り
西條公雄(埼玉県)
- 29 共に手を携えていく初鏡
藤井碩子(山口県)
- 30 一年の速さを笑う砂時計
菅原和子(茨城県)
- 31 見落とした但し書きから責められる
田澤宏(新潟県)
- 32 似てきたと言われだるまが迷惑
勢藤隆(群馬県)

- 33 湯気立てて怒る男が居なくなる
野田明夢(新潟県)
- 34 昼の月妻は女の顔になる
辻直子(東京都)
- 35 マン丸い月がお金に見える今日
安木沢修風(新潟県)
- 36 古代から津波遺跡が裏つける
塚本良子(愛知県)
- 37 土ひねり十指に夢が溢れてる
大岩歌子(岡山県)
- 38 悪筆じゃなくてワタシの新書体
鈴木青古(茨城県)
- 39 年金が最後のとりで濡れ落葉
増島淳隆(東京都)
- 40 首長さん誘致したこと棚に上げ
富高くにひろ(埼玉県)
- 41 学期末校舎黙って寝正月
村岡盛英(群馬県)
- 42 店の前骨折休む貼り紙が
中林恵子(大阪府)
- 43 さんがにち群れて遊ぶはずめの子
奥那於子(大阪府)
- 44 竹はらい籠らず龍年昇り籠
南喜美子(千葉県)
- 45 日々加齢鏡が恐くなりけり
岡弘子(埼玉県)
- 46 老いすぎて軋む体を補修する
大塚やまぶさ(埼玉県)
- 47 年明けてみても変らぬハ短調
鈴木宥夫(千葉県)
- 48 不足が出て幹事不手際責められる
鈴木章(新潟県)

俳句

- 50 柚子浮かべ被災者の辛折る夜
栗原啓子(埼玉県)
- 51 雪ばんば耳鳴りの午後誰も居ず
林克(福島県)
- 52 身の程の穴を探すや秋の蛇
佐野和彦(静岡県)
- 53 乾鮭の子供吊され目のうつろ
千代田俳徒(東京都)
- 54 一管と一鼓の間合ひ初しぐれ
遠藤和彦(埼玉県)
- 55 去年今年生きて始まるまんまかな
緑川禎男(埼玉県)
- 56 死の雨と思えば辛い時雨かな
井上静夫(栃木県)
- 57 なんとなく師走の二字に追はれをり
行方素芳(東京都)
- 58 冬田徑友とへッせを論じし日
竹本美美子(新潟県)
- 59 心経の一語なぞりて息白し
星野三興(新潟県)
- 60 一枚の蒼天せばめ風の陣
美濃部紘三(新潟県)
- 61 散り急ぐ真只中に枯の声
服部八重子(東京都)
- 62 旅人よ油断なかれよ浅き春
小松政雄(長野県)
- 63 震災に絆深め去年今年
井原毬子(東京都)
- 64 百ほど冬芽くだされ喪の人に
小島岳青(新潟県)
- 65 否応もあらざり冬木たちふさがる
吉田未灰(群馬県)
- 66 冬の里演歌の移動販売車
三津木俊幸(千葉県)
- 67 風紋に誓いし愛や虎落笛
関忠恕(静岡県)
- 68 二人居の今をときめく冬籠
神作洸江(埼玉県)
- 69 友人を先に入らせて初湯かな
小井寒九郎(三重県)
- 70 落葉踏む事にも倦みて里童
江見太郎(岡山県)

- 71 まんまるで心なぐさむ月夜かな
水落重武(新潟県)
- 72 山もみじ故郷行きの二人づれ
河合ヤスエ(大阪府)
- 73 短日や水屋袴を旅の荷に
橋本良子(埼玉県)
- 74 浮雲とそのまま暮るる冬木立
宇田川正雄(埼玉県)
- 75 川暴れ蛇籠蛇々冬ざるる
土谷敏雄(秋田県)
- 76 短日の終着駅の闇ふかし
菊池シユン(青森県)
- 77 夕映えに際立つ稜線冬めけり
梶鴻風(北海道)
- 78 遺影より皓齒の覗くなつな粥
大谷伊佐男(埼玉県)
- 79 水鳥の羽毛艶やか朝日燃ゆ
堀井酔人(茨城県)
- 80 断捨離てふ本をよく売れ十一月
藤沢樹村(東京都)
- 81 冬休みカバン振り振り習い事
楠本玲幸(大阪府)
- 82 小春日の民話佳境や鬼ばあ
大場きよし(宮城県)
- 83 冬ざるる醜いアヒルの広瀬川
鈴木与平(宮城県)
- 84 深秋や妣の使ひし鯨尺
津田忠彦(岡山県)
- 85 客を見て動いて見せる松葉蟹
田中昶(鳥取県)
- 86 寒鴉夕餉を囲む笑い声
野村牟人(東京都)
- 87 餅焼くや焦げのない方表とす
椋本望生(大阪府)
- 88 葛からむ硝子戸の中漱石忌
矢野絹枝(東京都)
- 89 冬薔薇ひらき切れずに風の中
沢田稲花(山形県)
- 90 幸せも夢も小さき藪柑子
堅田秀子(東京都)
- 91 ボジョレヌーボー舌でころがし香を
饗けり
田島星景子(宮城県)
- 92 空すでに寒星出づる小焼かな
松嶋光秋(東京都)
- 93 流し目に野暮なお方と雪をんな
山東爺(北海道)
- 94 年迎う八十七の老健やかに
凶子利明(兵庫県)
- 95 艶めいた豪快な句や漱石忌
浦橋渴雪(兵庫県)
- 96 大試験道真公に縋りつき
大竹憲弥(新潟県)
- 97 煩惱をかき消す音や除夜の鐘
湯前このゑ(東京都)
- 98 初雪の便りもありて夜の雨
副島加代子(宮城県)
- 99 父と兄の同じ寝姿掘炬燵
佐瀬チエ子(神奈川県)
- 100 前箆に突き出す葱の白さかな
今井岩夫(千葉県)
- 101 野良公と夫家入れぬ隙間風
加用章勝(千葉県)
- 102 山里の春なお遠し無言館
長峰正晴(千葉県)
- 103 誕生日の孫よりメール十二月
武市愛子(大阪府)
- 104 災害の無きを願いて初詣
早矢仕邦夫(愛知県)
- 105 おむすびのように祖母ある端居かな
北村純一(神奈川県)
- 106 今日身のありて眩しむ石路の花
道給一恵(埼玉県)
- 107 マスクして訳あり顔になつており
吉村充治(埼玉県)
- 108 浜路地を抜け山の辺の水仙花
大曾根育代(埼玉県)
- 109 わいわいとごんごんと歳の市
中岡昌太(神奈川県)
- 110 冬めくも断捨離できず今日を閉つ
関根千恵(埼玉県)
- 111 出陣の風を選びて武将風
根本真知子(東京都)
- 112 背伸びして皇帝ダリア月に恋
今井温子(奈良県)
- 113 正月や地べたを使う遊びかな
野木宗信(奈良県)
- 114 老いてゆく夫さゝ頼り冬籠り
伊藤玉枝(北海道)
- 115 真剣に自転車を漕ぐ兄の瞳
木下精(大阪府)
- 116 献上句背負ひ参上芭蕉祭
炭崎博(滋賀県)
- 117 どの糸染まる人生一葉忌
佐野しげる(静岡県)
- 118 人の世に片付くはなし漱石忌
川崎洋吉(福岡県)
- 119 佗助や漆黒の地を白に染む
山田幸代(兵庫県)
- 120 小春日や笑顔がむすぶ湯の絆
藤田昭代(岡山県)
- 121 元旦の萬代橋の臈月
安部哲(新潟県)
- 122 雪の朝垣根にめじろみえかくれ
須澤重雄(長野県)
- 123 時計を外して寝る
大岳次郎(神奈川県)
- 124 漁夫投げる小魚キラリ冬鷗
有田裕子(北海道)
- 125 日向ほこ悲憤慷慨したこと
居原田連星(大阪府)
- 126 寒たまご割れど考えままとまらず
堀たかこ(大阪府)
- 127 鍋の湯に氷柱ぶちこむ北の味
油谷郷史(兵庫県)
- 128 冬構亡母の晴着を肩に掛け
忍正志(兵庫県)
- 129 雨の朝眞冬並なり茶を熱く
小形さだ(東京都)
- 130 恙なく生きる仕合せ寒梅
芋木匡子(滋賀県)
- 131 実習田踏みしめて今日漱石忌
星一子(神奈川県)
- 132 春雷や蓮如が辿る浮身宿
久保和友(滋賀県)
- 133 凍蝶の即身仏や葉にすがる
布目雅之(埼玉県)
- 134 漱石忌ロンドン街で懐かしむ
五味田幸夫(神奈川県)
- 135 日の色とひとつになりし福寿草
秋谷静子(茨城県)
- 136 ふところに月光入れて深ねむり
棚橋麗未(東京都)
- 137 箸を刺す縁もゆかりも無き秋刀魚
辻升人(東京都)
- 138 初雪やお印ほどにひそやかに
山崎紀久江(福岡県)
- 139 寒菊や行年四十という位牌
三ッ木宗一(東京都)
- 140 気の急いで陽を仰ぎみる冬至かな
松本丈(千葉県)
- 141 湯たんぽと朝まで仲良い友である
湯浅芳郎(岡山県)
- 142 枝の先風に吹かれし枯葉かな
田中恵美子(山形県)
- 143 亡き友を思ひて帰る墨染めの空
若月理依子(新潟県)
- 144 鷹打ちし歳日当る去年今年
関谷秀二(愛知県)
- 145 楽しみの心大きく種をまく
青木ケン子(埼玉県)
- 146 冬茜火の見櫓へホース乾す
神一男(静岡県)

投稿作品



- 147 妖精のごとき丹頂光に舞ひ
堀田寿美子(北海道)
- 148 友と会う電車待つ間の日向ぼこ
山本直子(大阪府)
- 149 初午や祠小さき石造り
濱田イサオ(福岡県)
- 150 足踏みのミシンに油夜なべの灯
西口東治(大阪府)
- 151 大根の肌理の密なる民話村
竹澤茂子(大阪府)
- 152 恙なく迎へし古希や年の暮
杉村美保子(岩手県)
- 153 安達太良山や挽ぐことの無き今年柿
小林七重(新潟県)
- 154 夕闇が闇をよびゐてしぐれけり
長尾俊彦(香川県)
- 155 霜晴れや手振らず逝きし夫のこと
柚山美峯(東京都)
- 156 うたかたの去りてまた浮く冬の川
安藤まこと(岩手県)
- 157 讚美歌に騒音まじり社会鍋
内河邦久(東京都)
- 158 誘われて歌留多読み手に廻りけり
高杉杜詩花(北海道)
- 159 初夢や今年は亡父のおめでと
杉本敬治(愛知県)
- 160 栗をむく仕草も亡母に似てるとふ
小笠原紗恵子(神奈川県)
- 161 鉄の街復興の鐘づく大晦日
佐野しづ子(愛知県)
- 162 ストープを囲みし子らの手が開く
田中美智子(埼玉県)
- 163 クリスマス遠のく家族から廻り
阿部幸子(宮城県)
- 164 日向ぼこいつか別れる老二人
中嶋清子(佐賀県)
- 165 背に腹をかへたきことよ年の果
村木尚(新潟県)
-
- 166 霜降りて入江に浮かぶ警備艇
檜山とり子(東京都)
- 167 書初の課題になりし天地震迷
大橋恒次(新潟県)
- 168 合格の安堵に迎ふ明の春
大阿久雅子(東京都)
- 169 老二人借家の軒に柿すだれ
坪田勝秀(鹿児島県)
- 170 絆とて年末新聞切取りす
浜田蛙城(静岡県)
- 171 富士樹海白虎の如き霧が住む
岡村和郎(静岡県)
- 172 大夕焼ムンクの叫び聞え来る
勢川直美(大阪府)
- 173 賀状書く逢はぬ歳月指折りつ
堀木和子(大阪府)
- 174 朝刊を配る勤勞感謝の日
山崎吉晴(群馬県)
- 175 ほほみは明日への勇氣冬銀河
長島保子(東京都)
- 176 初電話故郷の声の懐しく
山崎ゆき(東京都)
- 177 落葉踏む音に還らぬ日を探す
渡辺嘉幸(東京都)
- 178 時雨なか脱原発の請願書
富樫和子(山形県)
- 179 年用意細く長くと蕎麦を打つ
中西秀雄(東京都)
- 180 行燈は源氏絵巻や紅葉道
勝田久美(大阪府)
- 181 狭庭とて門にかけたる注連飾り
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 182 水鳥の水尾を幾重も重ねたる
西川孝子(奈良県)
- 183 取り戻しつかぬ齢やあづき粥
鈴木清子(埼玉県)
- 184 退院も二日遅れの柚子湯かな
木村真澄(埼玉県)
-
- 185 年毎に孫の年賀も漢字ふえ
大久保アヤ子(東京都)
- 186 年玉や今年限りが今年また
羽根田明(神奈川県)
- 187 穴惑ひするりと今を生きてをり
中野勝子(鹿児島県)
- 188 年の瀬や喜怒哀楽の流れをり
橋本世紀男(東京都)
- 189 夢を追ふ瞳を閉じて去年今年
五十嵐睦博(新潟県)
- 190 冬冷の風が研ぎ出す里のきら
乾久子(滋賀県)
- 191 蔵王嶺の稜線白く山眠る
山川みどり(山形県)
- 192 冬日向故郷の新聞読み耽り
有田俊一(埼玉県)
- 193 蠟梅や日溜りに歌う仏たち
高垣勝代(大阪府)
- 194 心技体一つとなりて甲子園
樋口二葉(三重県)
- 195 天空を我ものとして初鴉
岩永登茂子(大阪府)
- 196 春雪の庭に優雅な景ぞ生み
小林敏宏(長野県)
- 197 竜の玉心ばかりを被災地へ
須田洋子(埼玉県)
- 198 辞典ひく想いの古語年賀書く
早川述史(愛知県)
- 199 サスペンスを又読み返す冬籠
近藤美好(新潟県)
- 200 ひと刷けの雲にさしこむ夕夕焼
中田文子(大阪府)
- 201 休日父と子嬉嬉と雪たるま
安達輝美(山口県)
- 202 恥らえる姫の横顔黄水仙
齊藤安弘(神奈川県)
- 203 しぐるるや出家ごころの捨て切れず
川口襄(埼玉県)
-
- 204 釣果など気にせぬ風情日向ぼこ
津布久信雄(東京都)
- 205 車椅子道ゆずり合い初詣
阿部徳夫(宮城県)
- 206 旅先のこむらがえりや虎落笛
北野耕兵(千葉県)
- 207 初日記不安を煽る放射能
有坂馨園(福島県)
- 208 山眠る最終バスは午後二時
今井勝子(新潟県)
- 209 冬晴れや帝釈天の時の鐘
小林紀美子(東京都)
- 210 路地裏に宿場の名残櫓明り
村上克哉(東京都)
- 211 砕かれし瑞穂の国へ初日の出
村松知津子(大阪府)
- 212 幼児にふるさと語る小正月
菅井文男(新潟県)
- 213 落葉踏むミレートの如きたたずまひ
村上千代(大阪府)
- 214 この先は喜怒哀楽や我が晩年
遊佐き久江(東京都)
- 215 夜の雨遠野ばなしの掘炬燵
古谷力(東京都)
- 216 冬棧橋見事巨船を手懐けて
岩村昇(神奈川県)
- 217 晴着着て正月歩む子供ごと
神野弘(岡山県)
- 218 冬帽子邪鬼のまなこを撫でてをり
小山たけし(埼玉県)
- 219 なんとなく来客ありて淑気かな
栗原黎(群馬県)
- 220 目瞑りて見ゆるものあり去年今年
中野博夫(埼玉県)
- 221 寒き日や連記に迷い日記買
森ふく(千葉県)
- 222 初釜や師の膝小さくなりけし
藤本悦子(東京都)

- 223 月蝕や耳にイヤホン聞きながら
橋本まこと(栃木県)
- 224 ゆたんぽを取り合っている三姉妹
高松愛(神奈川県)
- 225 ほのぼのと冬至の夜の一番湯
高松ゆか(神奈川県)
- 226 母思ふとき極月の涛の音
環順子(東京都)
- 227 初日受け梅のつぼみか光りけり
藤田三四郎(群馬県)
- 228 ウインドーも眠りに就きぬ年一夜
池田岬(埼玉県)
- 229 晩学の余生も楽し寒椿
岡村君枝(茨城県)
- 230 朝寒や片言乗せて乳母車
木田亜津子(兵庫県)
- 231 芹の香や野川の光る里のこと
川嶋法子(東京都)
- 232 農業を継ぐときつばり霜柱
江端秀子(愛知県)
- 233 涅槃廟にそわかとあるや初御空
二瓶邦枝(埼玉県)
- 234 逝き人の残しおきさる寒椿
中村和弘(愛知県)
- 235 元旦や今日の幸福いつまでも
延原令岱(岡山県)
- 236 正月や増えたるものに皺と愚痴
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 237 夕映えを水の底ひに破れ蓮
平山千江(岩手県)
- 238 初日の出みちのく思い手を合わす
針生清(千葉県)
- 239 去年今年心の怠惰いましめて
名取美枝子(千葉県)
- 240 初旅やいくさ道ゆく杖の音
石井美智子(埼玉県)
- 241 煩惱をさらりと流す初湯かな
紺谷睡花(東京都)

- 242 七草や臥す句友の奥方と
藤井春三(埼玉県)
- 243 ことごとく春待つころ寒の入り
鈴木みえ(長野県)
- 244 去年今年まばたきほどの早さかな
中野豊彦(東京都)
- 245 生き抜いて大戦語りし雪を踏む
五十嵐勝敏(新潟県)
- 246 山茶花にめじろ飛び交う散歩道
長谷部喜代子(大阪府)
- 247 梯子乗る親子の絆出初め式
清まさじ(静岡県)
- 248 明日もまた良い日であれと布団干す
萬濃その子(神奈川県)
- 249 バス停に妻待ちをるや後の月
浅野信廣(宮城県)
- 250 甦る支え合うこと去年今年
井口桂山(新潟県)
- 251 落葉径葉つばのフレイ踏まぬよう
中山日出子(大阪府)
- 252 探梅の奥より昏れて星生まる
池本勇(大阪府)
- 253 大根を洗ふ母の背夕茜
柴田恵美子(北海道)
- 254 倒壊の灯籠を避け初詣
小野正光(宮城県)
- 255 読み書に好かれ炬燵が放さない
重原昇(新潟県)
- 256 母の衣を仕立て直して年用意
北嶋八重(京都府)
- 257 初日浴び笑って耀耀信貴の山
中井文代(奈良県)
- 258 赤い美に鳥群らがりて寒に入る
岩田信(神奈川県)
- 259 新年の客に鳩笛吹く子かな
田野井一夫(栃木県)
- 260 進むべき道照らされし初詣
邑橋節夫(兵庫県)

- 261 湯気の立つまんじゅう売りに呼びこまれ
倉岡依世(東京都)
- 262 彼の土地を一人尋ねて冬の間
会田とし子(神奈川県)
- 263 わが影のひよりりと伸びて初日の出
佐藤信(神奈川県)
- 264 捨て畑の原子の土に黄水仙
村木友光(埼玉県)
- 265 若水や樋の先まで水の星
伊藤みさ(静岡県)
- 266 椀に盛る七種粥の香りかな
春口蓮男(静岡県)
- 267 帰る孫来る孫ありて年初
高井逸代(岡山県)
- 268 ざわめきも楽しからずや初詣
沢井博(群馬県)
- 269 臘梅の香りに心軽くなり
石川郁子(埼玉県)
- 270 まほろばは我生きる町春うらら
森川千英子(千葉県)
- 271 目標は百歳という初便り
早乙女文子(埼玉県)
- 272 天辺の柿に遊ばれ竿たむ
大塚徳子(埼玉県)
- 273 想定外想定外と着ぶくれて
井田由利子(宮城県)
- 274 羽子つきの音も聞こえず静かなり
福田和子(東京都)
- 275 卓上にピザ光りをり冬ざれて
鈴木蝶次(宮城県)

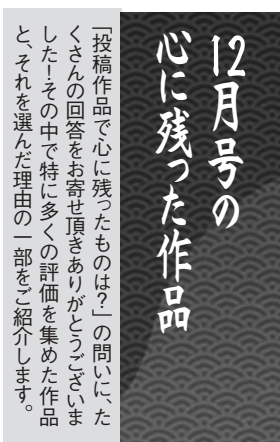
短歌

- 281 冬遠嶺彼の人いづこと尋ねれば里山
近くにひとの見えざり
稲垣恵子(埼玉県)
- 282 選ばれて病むにあらずやひとときを
不運・悲運をひきて夕映ゆ
北岡晃(兵庫県)

- 283 地震に崩る墓所の改装終へし夜新酒
いただきぐつすり眠る
黒澤正行(福島県)
- 284 たまたま我は人間に生れし丁寧に蟬
の死骸を埋めて立秋
寺田明子(東京都)
- 285 中国人の皆さんおきなわに移住移民
をよろしくお願いします
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 286 いただきしきささげの袋持ち替えて痺
れて重き足を足踏む
佐々木都(長野県)
- 287 正月の休み先取り孫来れば雑魚寝賑
やか余震来るなど
齋藤忠弘(千葉県)
- 288 苦の年もやがて終らむ来る年は望月の
君に逢えろと思へば 百花清(埼玉県)
- 289 雨も止み彩なす紅葉の松阪はしつと
り落着き心安らぐ 高須孝(愛知県)
- 290 ふるさとの土の香いの荷が届く藁縄の括
り切らず解きぬ 藤原昭三(滋賀県)
- 291 猫と父なくした後は雪道をさすらい
歩きただあてどなく
大橋絵代(千葉県)
- 292 寒気団通り過ぐまで息を止め丸まる
炬燵に計報届きぬ
鈴木清美(愛知県)
- 293 みてくれは挙骨のごとく・フランス大
きな声で夢を語る子
佐伯はる(奈良県)
- 294 アナログのテレビいまだにそのままに
埃かぶりで鎮座します
椎忠夫(神奈川県)
- 295 失意のうち土佐を去り行く牧者なり
少し道化てハンカチを振る
高橋邦子(高知県)
- 296 忠臣蔵演歌の巨匠偲ぶなり凜凜凜と
三波春夫よ
山本敏順(長野県)

- 297 月食に赤色光るや天体ショー月食終えり月の輪も消ゆ 佐野澄江(山梨県)
- 298 悲しみがわたしの横を通り抜け菜の花畠に春は来ている 寒川靖子(香川県)
- 299 大根に鬆入るがごとき母の骨労苦粗食に耐えたる証 安達一葉(北海道)
- 300 大根と牛乳かえば重すぎし後悔しつづ踏切りわたる 篠原三郎(静岡県)
- 301 九十歳の我ブランコには思はぬにたまたま義妹付き添へをれば 今井忠一(東京都)
- 302 宿毛出の逸材あまた里帰り音楽・相撲とタルマ陽の異彩 西山悌三郎(高知県)
- 303 朝まだき早や喧しく名も知れぬ鳥の啼く声響き来るなり 増田信雄(埼玉県)
- 304 何事ぞ空に貼りつく月なんか飛ばしてしまえと北風は吹く 吉野成行(愛知県)
- 305 黄昏に聞こえてくるは木魚なり憂いしこの世忘れたたずむ 音喜多千津子(埼玉県)
- 306 辰年の年の始めの一曲は天に捧げしわがレクイエム 阿部澄江(宮城県)
- 307 勇壮にわが生きてきて前庭の千両万両新年に観る 小暮昭司(群馬県)
- 308 存へて八十路のいのち今更に待むは己語る妻亡き 佐藤茂三郎(千葉県)
- 309 「山分けの由来は阿蘇円山よ」ガイド指差す山に岐路あり 土屋喜雄(山梨県)
- 310 手の中にしゃぶり残しのせんべいをにぎりしままにおさな子眠る 桑原謙一(群馬県)
- 311 早古稀と過ごせし時も東の間に喜寿の新年小雪降りおり 田中豊恵(新潟県)

- 312 いつになく岩根絞は咲き誇るづぐみひよどり来ず静か 濱崎祥子(鹿児島県)
- 313 病む我れにプライド捨てて明らかに笑つて過せと夫の励まし 田中迪子(東京都)
- 314 忘却の彼方にありし幼き日古希過ぎ集う人生楽し 辻忠城(東京都)
- 315 隣席のお下げ可愛ゆき女の子バックのなかみは六法全書 岩橋千代子(北海道)
- 316 我が此処現在存る証探ること父母の写真を飽かず眺むる 北村富士雄(新潟県)
- 317 寒き日や寒さにすくむ自らに焦立つごとくひと日過しぬ 井川英子(大阪府)
- 318 山茶花の凜と咲きたる赤と白心の和むコントラストよ 森崎榮久(岡山県)
- 319 次々を子らが差し出すお年玉老いて沁々来し方偲ぶ 佐藤古城(埼玉県)
- 320 ままお元氣ですかと幼児の夢の中まで探す悲しさ 青木日出男(群馬県)
- 321 夫と娘に似し血脈かまた五歳テレビゲームに夢中なる孫 浜野タミ(東京都)



- 痛な思いが伝わってくる 竹澤茂子(大阪府)・震災地の人々の心の叫びを聞く思いです 安達輝美(山口県)・原発事故で被曝した郷を捨て切れぬ切なさが伝わる 中野博夫(埼玉県)・老いてもまだ田畑を守る気持は変わりありません。気が持が良くわかります 橋本まこと(栃木県)・福島より届くこの句にはいいようのない哀しみが表れていて心にひびく 木田亜津子(兵庫県)・汚染された地、心の葛藤がうかがいしれる 池本勇(大阪府)・原発事故は終息どころではない。捨て切れず、が本当に切ない 佐藤信(神奈川県)・福島県の住民の実感そのものです 井田由利子(宮城県) ほか
- 【自句自解】
平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、東日本大震災・大津波・原発放射能被曝罹災の「あの日その時」から、異郷群馬県下への避難艱難辛苦のスタート。遅々たる生活環境の復旧を待ち兼ねて帰郷するも、放射能汚染は此所彼所に風評と相俟つての増幅を重ねて、数ヶ月を経るも娘家族に乳幼児を抱えての生鮮食材の確保に東奔西走の週日。然れど被曝による放射能高線量値となりしを承知の上で、父祖伝来の田畑への愛情、捨て難き心境を詠い残さむとの一句でありました。
- 《短歌》
21 みちのくの冬の海から見つけてと三 千八百人が呼んでる 黒澤正行(福島県)
- ・ただただ痛ましく 寺田明子(東京都)・発想に独自性があります 街より子(埼玉県)・呼んでいる人もせつないが呼ばれている人はなおかなしい 鈴木満明(東京都)・三千八百人の声の悲しさにひかれました 佐伯はる(奈良県)・冷たい

- 海の底から呼ぶ声が聞える思い 背すじがゾッとしました 芋木匡子(滋賀県)
- 34 もう一人産み育てたく思へども原発の国いかに生きゆく 小川和恵(新潟県)
- ・若い母の不安を思うとやり切れない 安達由美子(北海道)・ストレートに共感しました 篠原三郎(静岡県)・時事の問題と人生がからむ。未来への影響も暗示して深い 井川英子(大阪府)・現代の日本の影を三十一文字に良くぞ言い切った作であります 森崎榮久(岡山県)
- 《俳句》
42 十字架のごとく独りの稲架を組む 渡辺嘉幸(東京都)
- ・此の度の震災の背景を深く読みとめられる 中岡昌太(神奈川県)・昨年までは妻子も在りて稲架かけし 鈴木清美(愛知県)・農作業は孤独な祈りにも似たものなのです 湯浅芳郎(岡山県)・稲架を十字架とみる作者の辛さが伝わりました 富樫和子(山形県) ほか
- 《川柳》
277 親が居て妻や子がいて猪口がある 竹村穂夫(大阪府)
- ・「猪口」に家庭の幸せを表現して秀句。松田重信(埼玉県)：うらやましい。最高の幸せを詠んでいる 久本に地(岡山県)・親と同居(この温もりが猪口にあります。心暖まる句です 田澤宏(新潟県)・一家団らん夕食の風景が目につかびなごやかな家庭が思われます 大岩歌子(岡山県)・川柳は省略の文芸。究極の省略表現にして世界一の幸せ家族を見事に詠んだ作者の力量に感服 佐藤古城(埼玉県)
- ※今後もこの投稿を願っています! 尚、平日過ぎた作品を掲載できませんので、お詫び申し上げます。

詠み人スクランブル

前回のアンケート

Q.冬にオススメの
あたたまる食べものを
教えてください。
紙幅の関係上、すべ
てのお答えを掲載で
きませんことをお詫
び申し上げます。



郷土料理

三平汁。これは北海道の郷土料理で鮭
の切身に大根、人参等の野菜を入れて
味噌味+酒粕で仕上げます。とてもあ
たたまる
棚橋麗未(東京都)

ジャッパ汁。塩鮭、鱈の中落や内臓を
大根などの野菜と煮、大量のキザミ葱
で喰う、七味も可。津軽の名称。庄内
はどんがら汁 安藤まこと(石手県)
何はさておき「きりたんぼ」。鍋で地
物の具を沢山入れること
土谷敏雄(秋田県)

きりたんぼ。毎年年末に秋田県から送
られてくるのが最高。小、高と過し
た土地なのでなつかしくいただいていま
す
富樫和子(山形県)
あざら汁(気仙沼地方郷土料理)。白
菜などを漬けた物に魚の粗と酒粕を入
れて煮込んだもの 田島星景子(宮城県)
のつ汁。故里を偲びて
今井忠一(東京都)

上州名物おきりこみです。母の味です
吉田末灰(群馬県)
お切り込みウドンといってあたたまる鍋
に鳥肉、野菜を入れて炊く
遊佐き久江(東京都)

山梨のほうとう
佐野澄江(山梨県)

湯豆腐に熱燗の芋焼酎
坪田勝秀(鹿児島県)
妻に逝かれてしまい、もっぱら湯豆腐で
熱燗を楽しんでいます
大谷伊佐男(埼玉県)

一も二もなく野菜たっぷりの湯豆腐で
す。これに熱めの焼酎を添えたと最高。
もちろん新潟産の清酒もいいですね
藤沢健二(千葉県)

めん類

天ぷらそば 山崎紀久江(福岡県)
家で外食で、ショウガたっぷり天かす入
れて「釜揚げうどん」が最高です
森崎榮久(岡山県)
鶏卵うどん。とろみのあるうどんつゆを
卵とじにしてしようがを入れます
堀たかこ(大阪府)

名古屋の煮込みうどん。味噌を入れた
こつてりした味は身も心もあたたまり
ます
萬濃その子(神奈川県)
カレーうどん 渡辺嘉幸(東京都)
鍋焼きうどん。好みの具材を沢山入れ
てアツアツを頂きます
堀木和子(大阪府)

豆腐入りの鍋焼きうどん。あたたまる
上に栄養も抜群です 中野豊彦(東京都)
ラーメンです
大江秋月(兵庫県)

ごはん
ほかほかのご飯です 阿部澄江(宮城県)
岩手産の特上和牛を豆腐やしいたけ、
野菜を煮たのに白いごはんがよいです
松尾正一(石手県)

お鍋

家族で囲む鍋料理。一人の時は缶入り
コンクリーム 桑原謙一(群馬県)
特に「鍋料理」手足の先まで暖まり、
夜のトイレも遠くなります
田野井一夫(栃木県)
鍋料理、牛鍋、柳川鍋等、煮込みおで
ん
五味田幸夫(神奈川県)

河豚と鱈と鮫鱈。どれも絶品の鍋料理
です。郷里の銘酒「八海山」との絶妙
な相性。生きている至福を感じます。
人生万歳 佐藤古城(埼玉県)
鍋ものです。北海道は鍋種にする魚は
豊富です
梶鴻風(北海道)
茨城のアンコウ鍋はとても美味
菅原和子(茨城県)
やつぱり「石狩鍋」の粕汁でシヨ!!
鈴木岑夫(千葉県)

桜鍋が一番。肉は馬肉を主にし、鍛焼き
風に味付けする。野菜は下仁田ネギ、
春菊など。飲物は勿論熱カンで。風邪
気味のときは「ニクを加えること
百花清(埼玉県)
マグロとネギのみぞれ鍋！日本酒にぴつ
たり
堀井醉人(茨城県)
ねぎま鍋 加用章勝(千葉県)
水菜のはりはり鍋(くじらが手にはい
らないので豚肉で)
中山日出子(大阪府)

毎年、近くでボタン鍋を一人で食べに
行きます
忍正志(兵庫県)
牡蠣鍋、粕汁です 鈴木康世(東京都)
キムチ鍋。とり肉入れて野菜いっぱい
豆腐も入る熱々の鍋です
堀田寿美子(北海道)

お鍋とスンドゥブ 長尾俊彦(香川県)
温かい鍋料理。蕎麦屋で食べる鴨南蛮
水落重武(新潟県)
牛乳なべ 今井温子(奈良県)
豆腐鍋。具材は特に選びませんが牛乳
を少し入れると豆腐が薄くなるよう
です
秋谷静子(茨城県)

お鍋を囲み最後に「ご飯を入れ、卵を
割つてお茶碗に盛り分け頂けたら幸せ
です
村上千代(大阪府)
白菜の肉団子鍋。とろりとした白菜、
春雨であたたまります
倉岡依世(東京都)

鶏のすき焼風鍋。ご飯のおかずにとびつた
り
松本文(千葉県)
鍋もの、特に水炊きのだしを効かせば
ん酢で食べることに 近藤美好(新潟県)
ほうれん草と豚肉の常夜鍋、もみじお
ろしとぽん酢で 辻直子(東京都)
鍋物。残りをグラタンに仕上げると二
度楽しめます
星一子(神奈川県)
ネギをたっぷり入れたカレーうどん鍋
環順子(東京都)

ちゃんこ鍋やよせ鍋のあとの汁でご飯を
煮て食べるおじゃやは、体の底からあ
たまります
岡村君枝(茨城県)
おでん
大好きです。さあ次回は何を食べよう
か、この時がいいですね
松田義登(福岡県)
わが家の野菜を利用
寒川靖子(香川県)
カラシたっぷりのオデン。特に大根が
村岡盛英(群馬県)

すきやき
子供の頃から続くすきやきと焚きたて
のご飯。特に油身の付いた肉が忘れら
れない
早川述史(愛知県)
すきやきにビール、たまりませんね
春口蓮男(静岡県)

冬はやっぱり、寿喜焼きとおでん(野
菜、こんにやく、ちくわなどをうす味
にして)
相馬竹浪(新潟県)
何と言つてもすき焼が一番です。最後
はご飯を入れておじやです
井上静夫(栃木県)

お餅

豆餅を囲炉裏で焼いて
湯浅芳郎(岡山県)
私が発見したのですが、餅を焼き、砂
糖しょう油、ふりかけ(野菜・魚類)
をかけて食べると意外とおいしく…
美濃部紘三(新潟県)

A Q U E S T I O N N A I R E

●お雑煮

- ・あつあつのおぞうに。矢張りナベかな？ 安達哈子(新潟県)
- ・具沢山の新潟雑煮かな？正月以外にもよく食べますよ 小林七重(新潟県)

●おかゆ・おじや・雑炊

- ・1、朝の土鍋粥 2、昼の鍋焼きうどん 3、ヤサイ、肉、魚、貝、なんでも鍋 南喜美子(千葉県)
- ・野菜たっぷりのカレーとキムチの薄辛なべとそのおじや 鈴木満明(東京都)
- ・雑炊、鍋(水炊き)のあとの味わい。卵と海苔のネギ入り風味の良さ。あつあつを息吹きかけてたべること 勝田久美(大阪府)

●しょうが

- ・生姜紅茶。飲んですぐポカポカしてきます。紅茶にすりおろした生姜を入れます 山田幸代(兵庫県)
- ・生姜入り豚汁 高橋邦子(高知県)
- ・食べ物ではないですがあたたまるものといえば「生姜酒」につきます 今井勝子(新潟県)

●大根

- ・風呂吹き大根 有田俊一(埼玉県)
- ・聖護院大根(丸)を作っています。冬の夕、ブリのあらで大根煮 藤原昭三(滋賀県)
- ・野菜類特に大根など 五十嵐勝敏(新潟県)

●粕汁

- ・特級酒の酒かすに鮭のあらや大根、人参、油揚げを刻んで煮込めば出来上がり。ほろ酔い気分 居原田連星(大阪府)
- ・鮭、根菜類の具沢山のあつあつ粕汁を啜

るなど一番オススメしたいです

- 池本勇(大阪府)
- ・根菜を具沢山の味噌汁にして、酒粕を仕上にとかし入れ、更に生姜を入れても可 安達由美子(北海道)
- けんちん汁・けんちんうどん 津布久信雄(東京都)
- ・ねぎたっぷりけんちん汁
- ・具は里芋、トウモロコシ、スイトンの要領、味に厚みがある 宇田川正雄(埼玉県)
- ・しょうが汁をたっぷり入れていただきます 二瓶邦枝(埼玉県)
- ・けんちんうどん 今井岩夫(千葉県)

●カレー・シチュー

- ・カレー 高松愛(神奈川県)
- ・シチュー、お好み焼き、戦時下のすいとうんをもう一度喰べてみたい。だしの効いた香りあるものを。フッフー 神一男(静岡県)
- 汁物
- ・玉ネギとひき肉のスープ。(こししょう少々)安価で簡単に出来て身体があたたまります 三津木俊幸(千葉県)
- ・土シヨウガ入りの野菜スープ 芋木匡子(滋賀県)
- ・バターと牛乳たっぷりのカボチャスープが簡単です 山本津和(福島県)
- ・日本について長寿国香港。なぜと滞在の妹にきく。手作りのトリガラ野菜スープにあるようです。私も挑戦中、体ポカポカ。若く見られるのも。 塚本良子(愛知県)
- ・大鍋のポトフ 大曾根育代(富士見市)
- ・カローリを気にする私には贅沢の事ながらナット汁で満腹に！ 村木尚(新潟県)
- ・納豆味噌汁。出来上がり間際、ネギ小

口切り沢山と七味とうがらしを好んで。簡単、かつあたたまり、栄養と消化もよし

- 岡弘子(埼玉県)
- ・葱汁です 北川新(神奈川県)
- ・根深汁 小島岳青(新潟県)
- ・家伝の冬至汁があります。竈の大鍋に八丁味噌汁かかけっぱなし旬の野菜やダンになるもの何でも投げ入れ余熱で煮上げています 鈴木清美(愛知県)
- ・何と言っても「とん汁」根菜始め野菜いっぱい豚汁はおいしい!! 池田岬(埼玉県)
- ・矢張り「鱈汁」が最高と思う。古い体験で申訳ないが「富山県の宮崎海岸の鱈汁」が最高でした。秘伝の汁は「みそ」と「酒粕」の比率と思う 菅井文男(新潟県)
- ・朝夕の具の沢山の熱い味噌汁です 大久保アヤ子(東京都)
- ・すいとん。昔だんご汁といって代用食だったけれど暖まるしなつかしい 岩橋千代子(北海道)

●なんでも

- ・仲間とわいわい食べれば何でもおいしい 勢藤隆(群馬県)
- ・何かな？妻のつくった料理、何でも心あたたまります 増島淳隆(東京都)
- お酒
- ・梅干入りお湯割り焼酎よ！ 街より子(埼玉県)
- ・何はともあれ新潟淡麗人肌燗、加えてあんこう鍋で心身ホカホカ 北野耕兵(千葉県)
- ・玉子酒がベスト(母の味です。好き嫌いあると思う) 増田信雄(埼玉県)
- ・亡妻と盃を傾けたい久本に地(岡山県)

●甘酒

- ・野菜タップリの鍋、それに甘酒の中に焼酎を入れた甘酒カクテルを飲むと体ポカポカ 諸橋文男(新潟県)

甘酒をあたためて飲むのが一番好きです

- 山川みどり(山形県)
- ・酒粕で作る甘酒 栗原黎(群馬県)
- 飲み物
- ・食べものより飲みもの、ホットコーヒー。牛乳多目で砂糖は控え目に少々熱いものを 延原令岱(岡山県)
- ・二口ほどの濃いインスタントコーヒーにウイスキー、キャップ一杯ほど。それなくして家から外へ出られない 安部哲(新潟県)
- ・のんびりとお茶をのみ体をあたためる事もいいですね 近藤はつみ(福岡県)
- ・ゆず茶でほっこり♪甘めのシチューでぬくぬく 大橋絵代(千葉県)
- ・葛湯、あんかけ料理 平山千江(岩手県)
- ・ホットココアが好き。食べものなら茶碗蒸し。タバスコたっぷりのピザ 岡本恵(茨城県)

●甘味

- ・料理大好き人間ですがこの年齢になるとシンプルが何より。湯どうふの自分流とかぜんざい、おしる粉のたぐい 寺田明子(東京都)
- ・寒い時にたい焼、今川焼をひとつかつて食べる 梅澤鳳舞(埼玉県)
- ・やきいも 中野勝子(鹿児島県)
- ・手づくりのバレンタインチョコ 安部龍太(山梨県)
- その他
- ・チーズいっぱいグラタン。オーブンから取り出す時のぐつぐつの音がよい 岩崎令子(大阪府)
- ・「数の子を噛めば宇宙を泳ぐこと」。鍋といきたい所だがOno数の子の方がぐーんと心があたたまる 仁藤ひろじ(埼玉県)
- ・我が家では茶碗むしです。先ずはじめに出します。心まで温まります 森川千英子(千葉県)

滋味しみじみ◎◎◎

鈴木恒生様（東京都・町田市）

私が辿ってきたこの世の旅で、旨いものといえば、別府湾の城下鰯、越前小浜での蟹づくし、氷見での寒鰯、三重では松阪牛、東北にゆくと飯坂での湯上りに最高だった、あんぼ柿、平泉で味わった、ずんだ餅、新潟では雪中梅〔酒名は弊害ありか〕ののっぺい汁、人それぞれに旨いものには限りがあるまい。

わけても志摩半島賢島での漁師が作った、手こね寿司は忘れられない。薄切りの鰹の妙味といえようか。

信州は上山田温泉の、旅館名はさだかではないがきわめて素朴な食事が印象深い。

独り旅という俳句づくりで、生活からの息抜きでもあったが二、三泊したなかで、昼食に食べてみてくれと出されたのが、釜揚げ饅頭とでもいったらいいのか、鉄鍋に手打ちうどんが湯気をあげて、用意された地味噌、辛味大根、鰹節を碗に入れて掻き混ぜ、鍋のうどんを引き摺り出して食べる。もともと麺好きなので、箸の赴くまま腹具合も関係なく食べたものだ。

またその折りの鮎色をした野沢菜の漬物のシャリシャリ感は、季節とあの土地ならではの味わえまい。土産物のそれとは比べものにならなかった。

辛味大根うどんを抱いて喉とほる 恒生

●食に関するミニエッセイ「滋味しみじみ」の原稿を募集しています。400～500字の原稿をP16 下記の住所宛てに封書かメールにてお送りください。勝手ながら採用の可否については、弊社に一任させていただきます。おいしいお話、大歓迎です!!

第15回日本自費出版文化賞作品を募集中

一般の人の目に触れにくい日本自費出版物に光を当て、再評価・活性化を促進しようとなっている自費出版文化賞。弊社より出版し受賞された作品もありますので、ぜひこの機会にチャレンジされてはいかがでしょうか。

■応募資格／制作費用の全額または一部を著者（個人・団体）が負担し、日本国内で2000年以降に出版され、主として日本語で書かれた一般書で、製本された著書が対象。

■受付期間／2011年11月1日～2012年3月31日

■応募方法／所定の応募用紙に必要事項を記入のうえ、応募著書1冊を添えて送付。※所定用紙はホームページからダウンロードできるほか、弊社にも若干ありますのでお問い合わせください。

■申込み先／〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町7-16
日本自費出版文化賞事務局 電話 03-5623-5411

ポストカードの作者が地元新聞に!

弊社のポストカードの絵の作者でボタニカルアーティストの浅野利恵さんが、地元「新潟日報」の「ひととき」欄に紹介されました。たまたま図書館で見たボタニカルアート（細密に描く植物画）に「これだ!」と衝撃が走り、以来15年。昨年は初の個展を開き、寒いこの冬場は室温で花が変化しないよう、足元のホットカーペットだけで暖をとり、夜中まで集中して描くこともあるという程の熱の入れよう。これから、またどんな新しい作品に出会えるのか楽しみです。



ポストカード好評発売中!

毎回ご好評をいただいている当社のオリジナルポストカード（1組8枚入り500円×各シーズン）。今回は春バージョンより「スイートピー」を同封させていただきました。お気に召されましたら、同封のアンケート用紙にご希望の季節、セット数を明記のうえ、**必要金額分の切手と一緒に封書にてお申し込みください。**



スタッフの一言

Q. 冬にオススメ!
あたたまる食べものを教えてください。
（「今年にかける想い」を手に）



母の作るVAN HOUTENのココア粉をバターで練って牛乳を足した特製ココアが大好きでした。もっとバタ臭いムムムした大人になる予定が、今はあっさり湯豆腐+日本酒派。



母が作る、蕪を出汁で煮込んだもの。料理名は不明ですが、とってもおいしい! 身も心も温まります。そろそろ食べたいな〜。



きりたんぼ鍋。父の転勤にともない、秋田に住んでいたことがありました。そのときに教えてもらった料理です。ごぼう、舞茸、鶏、ねぎ、せり、たんぼが入ります。ああ〜秋田も寒いだろうなあ。



焼いも。甘くて温かい食べ物で体も心もほかほかになります。これまで大変お世話になり、ありがとうございます。皆さまの温かいお声が何よりの励みでございました。



きのご豆腐!よく作ります。だいたいなめこでえのきを足すこともあります。少し生姜をいれた出汁醤油味にし片栗粉で少しとろみをつけ、小さく刻んだ柚子をひとつまみ真ん中におきます。



寒い日と風邪をひいたときは、必ずとっていいほど豚汁を作ります。いろんな野菜をいれて煮て、熱いお碗の中に七味で辛くなったものを食べます。風邪も飛んでいきます。



独身の頃は寒くてバス停近くのコンビニに寄り、ついつい肉まんやあんまんを買って食べながら帰ったものです。今は暖かい部屋で梅酒のお湯割りを飲んで温まります。



外は雪がしんと降り、家族（愛犬も）でこたつに入ってニコニコ（ダラダラ?）と幸せ〜に過ごすとき。その時に飲食するのは何であれ、ほっこりあったまります。



もう少しで6ヶ月!母乳しか飲まないまるまる結月ちゃんです。

●お客様の『リレーエッセイ』

穴八幡と古本屋

吉田 緑

(千葉県・市川市)

私は、東京牛込に生まれた。牛込は、JR飯田橋と市ヶ谷と地下鉄東西線神楽坂駅の真ん中あたりにある古くからの住宅地である。高度成長期に子どもだった私は、今思えば一番よかった時代かもしれないと思っている。

奇跡的に焼け残った古い家に育ったので、戦前の生活に近いことも味わった。山の手と下町の商店街が混じった地域であるが、どちらかといえば山の手気質が強かった気がする。古い家の割には宗教には熱心ではなかった我が家ではあるが、唯一暮れの冬至の日から受けに行く早稲田の穴八幡の「一陽来福」のお札だけは、物心ついた時から続けている習慣である。

結婚し牛込を離れた今も、毎年暮れに受けに行つて大晦日の除夜の鐘が鳴ると、毎年変わる吉方の壁にお札を貼りつける。新年が明けると。

金運や商売繁盛、家内安全と聞いている。長年続けているが、恩恵にあずかっているのだろうか。やめたら何か不都合が、起きる気がしないでもない。

年に一度早稲田に行くと「いけない、いけない」と思いながら古本屋に寄ってしまう。三十年以上前は、穴八幡の早稲田通りを高田馬場まで両側に古本屋があった。古本屋だけでなく下宿屋、食堂、マージャン屋、喫茶店、小さな酒場があったが、道路沿いは、みなビルやマンションになった。ビルに建て替えて古本屋を営んでいる。

私は、物を捨てられない。本は、どれくらいあるのかわからない。買わないようになるべく図書館でと思つていても、興味のある本は手にいたくなる。

それだけでなく置いておきたくなる。何かのきっかけで、あの本の、あのあたり、あのくんだりと読んでみたくなる。その時いくら探しても見つからず、処分したことに気づいた時のひどいショックを何度か味わっている。

そのショックより倉庫のようになってる家に住んでいる方が気が楽だ。この間も「止そう、止そう」と思ったが、美術全集を探していたので入ったら、私の為の本屋さんかしらと思つたが、美術書は高価であるし、古くてかまわない。欲求のままに買い込んで、重いがタクシーに乗つて浦安まで帰るわけにはいかない、手がちぎれそうな思いをして地下鉄で帰った。

地下鉄入口の近くに同級生がいて、パン屋さんを営んでいた。覗くほど親しいわけではないが、同級生の家の商店が開いているのを見て、後を継いだのだろうか、それとも兄弟が継いだのかなどと毎年見ていた。昨年まであったが、今年はビルに変わっていた。都心で同じでいられるはずはないが残念だ。子どもの頃、お屋敷と呼ぶしか呼びよのない大きなお屋敷がたくさんあった。どこが入口なのかわからないような、うっそうとした門の奥の中の様子など全くわからないような大きな家がたくさんあったが、ビルやマンションが全く違う小さい家に変わっている。小さい時の思い出が壊れていくように寂しく感じた。



新潟ぶらり

★早朝の福島潟

大寒の翌日、しかも最も気温が下がっている夜明け前。新潟市の東方に位置する福島潟へ向けて車を走らせた。潟の前に広がる雪原で夜明けをむかえる。真つ暗だったのが薄墨になつていく。湖面が山々を映し出す。ものすごく寒い。でも、あの暖かい布団を出てきた甲斐があつたなあと思う。

もう一ついいことがある。早朝に訪れると実に多くの鳥に会うことができるのだ。潟内が複雑に入り組んでいて鳥の隠れる場所があること、また複数の川から流入があり結氷しにくいこと等から、この潟は鳥たちの格好の居場所となつている。なんでもここは天然記念物の渡り鳥・オオヒシクイの日本一の越冬地で、これまでに二二〇種以上の野鳥が確認されているという。

こんないいところ、バードウォッチャーが逃すはずがない。早朝にもかかわらずカメラを携えたそれらしき方が数名。すれ違いに「おはようございます」と言いながら、雪で細くなつた道を譲ってくださいました。

潟内の野鳥観察施設「雁晴れ舎」は三階建て相当の高さがあり、鳥の

観察だけでなく景色を楽しむのうつつけ。朝日に照らされる山々と潟、たくさんの鳥たちを見渡せる。これがまた息をのむほど美しい景色だった。

最後に、凍つた道を戻つて潟近くの「ビュー福島潟」園内にあるという句碑を探した。句碑探しには時間がかかることが多かったが、今回ばかりはすぐに発見。まばらな木々の真ん中、私に背を向けて立つていた。雪に足をとられながらやつと碑の反対側にまわり、刻まれている字を読んだ。

渡り鳥みるみるわれの小さくなり

上田五千石

去つていく者に、私は小さくみえることだろう。碑に向かいカメラを構えた私の頭上を、雁が力強い羽ばたきの音を残して過ぎて行った。

(菅真理子)



▲左端の建物が、鳥獣保護区管理センター「雁晴れ舎」

★朱鷺メッセ

新潟には地域に根ざした文化、芸術が育まれている。今年には三年に一度の「大地の芸術祭」と「水と土の芸術祭」が開催される予定で、人間と自然との関わりや自然と共に生きる中で生まれた文化が、国内外のアーティストと地域住民の交流によつて作品になつていく。暖かくなるころにはアートで新潟が賑わつていることだろうと思つたと楽しみだ。

イベントでなくとも楽しめるアート、文化もたくさんある。

新潟コンベンションセンター「朱鷺メッセ」もそのひとつだ。信濃川が海に注ぐウォーターフロントにあり、船をイメージして設計された建物が美しい。一番高くそびえ立つ万代ビルは、新潟の新しいシンボルとなつているのではないだろうか。

朱鷺メッセには、現代を代表するアーティストの作品が誰も見られる場所に設置してある。写真は万代ビルのすぐ脇、信濃川を臨む芝生にある作品。時間がくると石の割れ目から霧が出てきたり、夜になると光を放つたりして、



その場にいれば不思議な魅力に引きつけられる。「灯台」というタイトルだそう。この他にも、全五人のアーティストの作品を同じようにみることが出来る。

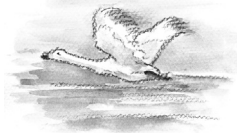
また、万代ビル三階には「B&Coba」があり、新沼市街地、日本海、佐渡島などを眺めることができる。地上約一二五メートルの高さは日本海側随一。「夜景100選」や二〇一一年度の「日本夜景遺産」に選ばれるなど、評価されている。新潟の美しい景観をぜひここから楽しんでみてはいかがだろうか。



■朱鷺メッセ
住/新潟市中央区万代島六番一号
☎/025-246-8400

さて、二〇〇九年十月より新潟ぶらりを書かせていただいたて退社することとなり、私が担当させていただきましたのは今回で最後となります。これまで拙い文におつきあいいただきました皆様、誠にありがとうございました。

(仲由真実)



言わなくてもいいことを

佐藤弓生

皆様こんにちは。私はおもに短歌をつくっています。なぜ俳句でなく短歌なのかといえば、坪内稔典さんが分類されたところの「短歌的人間」だからなのかもしれません。が、そもそも上京してきたとき某文学サークルに参加したらそこに歌人がいたとか、連句会におさそいいただいたり脇句を付けるおもしろさを知ったとかいう「偶然の出会い」が大きかった気がします。

なぜ俳句でなく短歌なのか。その理由を、他の歌人からお聞きすることが、たまにあります。特定の歌集や歌人——たとえば寺山修司の『空には本』——に魅せられて、といったなりゆきが多いようです。それは、自然なことですよ。その次くらいによく耳にするのが、五七五だけでは思いを乗せきれないので、という説明です。

思いを乗せるとはどういうことでしょうか。

俳句は省略の文学であり、思いをながなが述べない。「言わなくていいことは言わない」のが鉄則でしょう。すると短歌は、「言わなくてもいいことを言う」詩型ということになるでしょうか。そのとおりでしょう。それは「言いたいことを言う」とは、ちよつとちがいます。

思ひとは、「言いたいこと」にもまして「言わなくてもいいこと」を指す語である。そう考えてみます。

青空の井戸よわが汲む夕あかり行く方を思へた
だ思へとや
山中智恵子

お一人目の中原道夫様から前回の中西夕紀様まで、5年にわたって10名の俳人の方々に「執筆いただきましたが、今回は初めての歌人登場。中西様いわく「角川短歌賞を取られたすこい感性の持ち主です」。実に楽しみです。

この歌の結句「ただ思へとや」はまさに、言わなくてもいいことをあえて言いなおしています。言いたいことはすでに四句目で、「行く方を思へ」と簡潔に言いきってしまいました。あとは残響のみです。

言いたかったことの残響、omoeという音声の残響、「青空の井戸」から「夕あかり」を汲むという幻想的風景の残響。「夕あかり」と「行く方」の頭韻も、まだしばらく共鳴しているでしょう。

青林檎与へしことを唯一の積極として別れ来に

けり
河野裕子

コンパスを踊らせながら決めたんだいちばん言いたいことはいわない
飯田有子

一首目は、相手に言えなかった思いを、歌に託して言外に伝えてきます。言えなかったのか、言わなかったのか。内気なようでどこか意志的にも感じられるのは、「与へし」の一語によるものかもしれません。ポップな口吻の二首目は述志であるとともに、短歌の性質を反語的に言いあててもいそうです。

思ひとは、感情、喜怒哀楽の残響ともいえます。本誌名にちなんで、次回以降、喜怒哀楽にまつわる短歌をいくつか読むことにします。

2012. 2. vol.60 (2012年2月10日発行/隔月発行)
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション
〒950-0801 新潟市東区津島屋7-17
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
☎ 0120-819-395
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

編集後記

3年弱、いつも穏やかにニコニコと親切で自分のことよりも人のこと。そんな仲由さんが1月末で退社することとなった。今年にかけの想いの一語「歩」を求めて、その素直さのままに歩を進めてほしいと願わずにはられない。一人愚娘も来月には旅立つだろう。今は上京し受験真々盛り。おのずと一人になる時間が増えた。ご飯を作る時改めて考える。私の好きな食べ物は何だったっけ？みんながみんな常ならず。同じ場所には留まらない。少しずつ「私」の自分の時間を充実させたい。昔「マイウェイ」を熱唱するおじさんを冷めた目で見ていたけれど、みんな同じ。自分の道を歩むしかないんだ。(木戸敦子)